
clever imitation

東雲咲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

clever imitation

【ZPDF】

Z0026E

【作者名】

東雲咲夜

【あらすじ】

友人達は、私達の事を幸せだという。幸せな、恋人同士だと。本当にそう見える?私達は偽り。よおく見てご覧?本当の姿が見えてくるから。

私の友人も、彼の友人もみんな幸せそうだねっていう。
そんなこと言わないで、よく眼を凝らしてご覧?
もう一度同じ事が言える?

学校の授業が終わり、私は校門へと急ぐ。
どうにも金曜日はみんな騒がしい。休日に向けての計画でも立て
ているのかしら。

ざわめく廊下を抜けて、下駄箱で靴を履き替えて。
彼はきっと几帳面だから、私よりも早く着いているはず。
待たせてはいけないと何故か焦りながら。
心に浮かぶのは、期待と恐れ。

辿りついた校門には予想通り、既に彼がいた。
「ごめんなさい。待たせた?」

門に寄りかかるようにして立っている、長身の男子生徒。
少し気だるげな雰囲気を常に纏っている彼は、私にふわりと微笑
みかけた。

「俺も今来たところだから、平氣だよ綾」
「それならいいけど……帰りましょうか」
「そうだね」

我妻漣、それが彼の名前。
春日綾、それが私の名前。

私たちは、一応付き合つていて、世間一般で言つ恋人という関係。
それなりに仲も良くて、土日はデートをしたりもする。
彼はクラスの中でも結構の美形。

体つきはしつかりとしていて、性格も優しくて、気配りが上手。短めの髪型もよく似合っている。キレイな澄んだ瞳をしている。私は、一応醜くはないと思っている。あくまでも、私の予想だけれど。

「もうじき進級だね」

「そうね。いつの間にかそんな季節になつてたなんて」

「俺達が最上級学年だつて。何だか笑つてしまつね」

「何か思うことはある?」

漣、あなたは何を考えているの?

「特にないかな。クラス編成つていっても、あまり均等に混ざらないしね」

「確かにあまり変化はないよね」

「まあ、進路関係とかは忙しくなるけれど

「忙しくても、会ってくれるかしら?..」

「もちろん。綾に会うための時間なら、いくらでも作れるさ

それは、私に会いたいと言つてくれているという事。

普通ならばとても嬉しいこと、喜ぶべきこと。

けれど私は虚しくなるばかり。

不意に、彼が私の長い髪に触れる。

さらりと撫でるように掠めた彼の指は、ビートなくすべぐつたい。

「どうかしたの?」

「綺麗な髪に、『ヨミ』がついていたから」

「ありがとう」

「明日はさ、空いているかな?」

「私? もちろん大丈夫よ。いつも暇だから」

「それはよかつた。おいしいお店を見つけたんだ、どうかな?」

「とても楽しみだわ。駅で待ち合わせでいい?」

「綾が好きなように」

「じゃあ、また明日会いましょう」

漣のその優しさが……私を串刺しにする。

冷たくしてくれたら、割り切れるのに。

人と会話しながら歩く道は、とても短く感じるもの。学校から駅まではあまり離れていないせいと、余計に早く感じる。帰りの切符を買って、改札口へと向かつ。通勤、通学帰りの人の群れに流れながらも後ろを振り返る。そこには、もう彼の姿は見えなかつた。

その日はとてもいい天氣だつた。

空は青く澄み切つていて心地よく。

爽やかな風が、様々な春の香りを運んできてる。

柔らかな春の日差しはとても気持ちがよかつた。

約束道理、私は彼と喫茶店でお茶をした。

アンティーク等が置いてある、落ち着いた店内の装飾。

ふんわりと甘い洋菓子に、品のいい香りの紅茶。

優しい雰囲気と一緒に耳に心地よい曲が流れている。

彼はこうじうお店を見つけてくるのが何故かうまい。

女として羨ましいくらいに。私のセンスが悪いというわけではないけれども。

そこで一時間ほど談笑してから、いつもの場所へと向かつた。

いつもの場所 街の外れにある、小さな川。

土手には、たんぽぽやつづくし、なずな等の野草が咲き誇つていて。

緑の絨毯に色を添える……黄色、茶色、紫色に赤色。

隣には、彼が座つている。私の肩を抱きながら。

とても、穏やかで落ち着く光景。

けれども、彼の瞳はどこか遠くを見つめていて。

私の心も違う人の事を考えていて。

それでも青空のなか、雲がゆっくりと流れていぐのは、綺麗で。

私と漣が初めて出会ったのは、とある合コンだった。

親友が、一緒に来ないかと話を持ちかけてきたのだ。

彼女は、とてもかわいらしくて、優しくて。

合コン等やるのかと、とても驚いた気がする。

最初は乗り気ではなかったけれど、一回ぐらい参加するのもいいかと思って。

向かったカラオケで、彼、に出会った。

同じ学校の漣がいたことにも驚いた。

彼は、漣の親友という話だつた気がする。

スポーツが大好きで、肌は健康的に浅黒かつた。

元気がよく、はきはきとしていて、楽しそうだつた。

今、その瞬間を全身で楽しんでいた。

私は彼に一眼ぼれをして、漣は私の親友に恋をした。

それからの数ヶ月が　とても楽しかつたと記憶している。

何処に遊びに行くのでも、そのペアで行つて。

ダブルデートなんていうのもしたような気がする。

皆で、馬鹿みたいに笑つていた。

太陽みたいに、眩しいくらいに光輝いてた日々。

愚かな私はいつまでも、ずっと永遠に続くような気がしていたの。

永遠なんてモノ、ないかも知れないよ？

確かに、彼女がいつた言葉。私が、ずっと続いたらいいね、といった時に。

彼女は間違つていなかつた。今なら、痛いほどわかる。

永遠なんてモノ……そんなものは存在しないの。

終わりは、いつも突然に。静かにやつてきて奪い去つていく。

ある日、私の家に漣が訪れてきた。

珍しいと思いながら、漣を中心に入れて。

何やら沈みこんでいる漣が言った言葉。

それは私にはとても信じられなくて。嘘だと叫びたかった。
いくら叫んでも、どうしようもない事実だというのに。

『彼女が交通事故で亡くなつた』

漣が伝えた事。声は、やつれて悲しみに満ち溢れていた。
そして漣は、一粒だけ涙を零した。

最初で最後の漣の涙。

それでも私は泣けなかつた。

それから、私と彼の恋もつられるように終わつて。

私と漣は二人残された。

私の彼は、別の人と付き合いだして。

私達は四人でひとつだったのだと知つた。

親友を亡くした私は、抜け殻のように漂つていて。
彼は死んだ訳ではないけれど、もう私の前にはいなくて。
一度とあの日には戻れないと知つているのに。

頭や身体が理解しても、心が納得していなくて。

まだ色鮮やかに彼の面影が瞼の裏に焼き付いていて。

眼を閉じれば、フィルムに映る写真のように浮かび上がってきて。

スポーツに熱中して、輝いている姿。

不器用だけども、私を気遣つてくれたりもした。

その時に彼が見せた、はにかんだ笑顔。

力強くて、纖細な微笑み。

とても淡くて……朧^{おぼろ}げな影。

忘れるくらいなら愛したりしない。

そんな時だつた。

『付き合わない?』

とても甘い漣の言葉。

もしかしたら、心の片隅で、待ち望んでいたのかも知れない。

抗うのは簡単だけれど、そうすると私が消えてしまつ。

親友を亡くした私には、代わりとなるものが必要だつたから。

それは、恋人を亡くした漣も同じだったようで。

そうして私達は恋人となつた。

偽りの、まやかしの恋人。

存在しない睦言を囁き合ひ、傷口を舐めあつ関係。

それを友人達は、幸せ、だといつ。

一体何処を見ているのかしら。その眼は飾りなのかと問いたい。
団のようにしてよく見てよ。それでもまだそんな戯言が言えるの
ならば。

その眼は濁つてゐるに違ひないわよ。

お互いを熱く見つめる視線は、絡み合つことはなく。
深い傷口は交差して、交わりながら、血を流し続ける。

暗い夜に、温もりを求めて唇を重ねてみても。
癒しを求めて、幾度となく身体を重ね合わせてみても。
熱い身体から伝わるのは、凍えるような痛みだけ。
流れ込んでくるのは、虚無感。

渴望して、与えられるのは偽りの麻薬。

絶望して、奪われるのは愛情。

紛い物の温もりに身を浸しながら。

愛していない訳じやない。嫌いな訳じやない。

でも、心のそこから愛しているのとは違つ。

彼を愛していたのとは、違う感情。

カタチのわからない、未知の想い。

本当に……好きなのかさえわからない。

そんな感情で、愛し合つことが出来ると思つ?

いつまでも、触れ合つことが出来ずに入れ違つ続ける。

それが、今の私たちの関係。

恋人という土台の上に立つてゐる、崩れかけの感情。
何がきっかけで、いつ壊れてしまうかも解らない

脆く儚い夢

物語。

隣に座る彼を見る。

少し寂しげな顔をして流れる川を見つめている。
彼が何を考えているのか、私には解らない。
私が何を考えているのか、彼には解らない。
繫がらない想い。

何もかも、全てが一方通行のみ。

やがて夕陽が顔を覗かせ始めた頃。

「そろそろ……帰ろうか？」

汚れを払いながら、立ち上がる彼。

優しく微笑みながら私に手を差し伸べてくれる。

「そうね。だいぶ時間が経ってるもの」

「また明日も会えるかい？」

「私は、いつでも空いてるわ」

嘘の微笑みを貼り付けながら答える。

「彼が……いないから？」

顔は笑つたまま、眼は笑わずに尋ねられてしまった。

「そうよ。漣も、彼女がないから……暇でしょう？」

「ああ　　そうだつたね」

傷を舐めあいながらも、時にはお互に傷を抉りあう。

癒えてしまわないように。

絆が絶えてしまわないように。

私達は、友人の死という絆で繫がっているから。

「じゃあ、また明日もあの喫茶店で」

「わかつたわ」

私達は、寄り添いながら駅へと向かう。

また明日、会うために。

腕は組むけれども、手は繋がない。指も絡ませない。

お互いがちゃんと向き合っていないことを承知の上での関係。
不安定な形を作りながら、時には少しが崩してみたりする。
終わりたいのか、終わらせたくないのか。

彼が、私が優しく微笑むのは……利口な真似。

そうしていれば、続けることが出来るとわかつてているから。
こんな、星屑よりも儚い関係だけ。
終焉がいつ訪れるのかわからなくとも。

私は 笑うわ。

決して、悲しんだり嘆いたりしない。
涙も見せないし、媚びたりしない。

それが、自分への戒め。

関係が崩れて、消え去つても……私は笑い続けて見せるわ。
だから、漣も笑っていてね。終わりが来るその日まで。

私達は、今日も偽りの愛を紡ぎ続ける。
時に激しく、時に冷ややかに。
ぐらぐらと揺れながら。

でも、こんなに不安定な関係なのに……。
何故か解らないけれど。

このままで在り続けたいと思つのは 变かしら?

(後書き)

自作お題から作ると……ホラーに行かないのは何故。
私が書くのは、どうもみつしりしているので、今回は改行を増やしてみました。如何でしたでしょうか？

恋入つていうのは色々な形がありますから、こいつら形もあるのではないかな～と。

これは……恋愛なんでしょうか？

少なくとも私は、偽りに魅せられてしまははずです。何かを感じていただけたら、幸いです。

瞳を研ぎ澄ませたら、何が見えました？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0026e/>

clever imitation

2010年10月8日15時51分発行